

談話分析から見た主語



われわれが何気なくかわす会話のなかで、話題は次々に移り変わっていく。主語や主題に注目して分析することで、談話のまとまりがどのように表れ、どのように方向を決められていくのかが見えてくる。

野村眞木夫

(のむい まきお)

一 談話分析の特性

「談話」を音声言語の意味でとらえるとき、その分析対象には次の項目をあげることができる。

- (1) a 談話の目的と話題に関するまとまり
- b まとまり・発話の機能と相互関係
- c 参加者の交替（話者交替）
- d 参加者の相互関係

aは、文字言語による文章についても問われ、言語表現の一般的な特性である。発話者や書き手がその談話や文章を表

現する目的が特定できず、また話題の観点からまとまりを見いだせないとき、これは言語表現の単位体と認定しがたい。

b以下は、個々のまとまりや発話をどの参加者がどのような目的で表現しているのか、それらが談話の展開においてどのように整えられ関係しているのか、参加者が相互にどのように関わり合っているのか、などの現象として具体化するものであり、優れて談話の特徴づける性質をになう。発話の機能や関係は、発話者が交替し、自分または相手の発話に言及し、自分の発話をそれらに結びつける過程で発現する。

本稿は、以上のような特性を有する談話において、主語と

これに類する要素の働きと形式をとりあげ、事例に即して問題を整理する。主語の研究は、微視的な統語論のレベルで行うことが中核を占めてきたが、談話のまとまりや展開という中間的なレベルで考察することで、この目的に接近はかる。

二 談話のまとまりかたと主語のはたらき

まず、例をあげる。参加者は、大学三年生の女性である。

(2) 1 A .. ウリポーってウリに似てるから？

2 B .. 模様が？//それとも形が？

3 A .. んー。

4 A .. 模様が。

5 B .. (1.2)じゃでっかいイノシシ//も、

6 A .. イノシシも一緒だよ

ね。

7 B .. ウリ、ポーじゃないからー。

8 A .. じゃ形があれはウリなの？

9 B .. わかんない。

10 B .. ウリ、ウリの模様に似てるからウリポーなのかな

1。

11 A .. (1.3)縦線？入ってるよね、//イノシシ。

12 B .. 縦とゆーか、横と

//ゆーか。

13 A .. 横、か//な。

14 B .. い、んー//ー。

15 A .. んー。

16 B .. 体に平行に？

17 A .. んー、//そーそー。

18 B .. 縦縞じゃないもんね？

19 B .. 横//か、じゃー。

20 A .. んー。

21 B .. んー、だからウリポーってゆーのかなー。

22 A .. わかんない。

//は発話の重複が開始される位置、？は上昇のイントネーション、()内の数値は沈黙の秒数を表す。

談話(2)における話題のまとまりかたを明らかにするために、談話の展開する過程で参加者たちが明示的に言及する対象を観察しよう。その指標として、主語とこれに類する要素に着目すると、次の部分を取りだされる。主語は「くが」の形態で 2 B・4 A 「模様が」、2 B・8 A 「形が」。主題は「くは」「くって」の形態で 8 A 「あれは」、1 A 「ウリポー

って」。取り立て成分は「くも」の形態で5B・6A「(でつかい)イノシシも」。また、無助詞成分として「くも」の形態で11A「縦線」「イノシシ」がある。

1Aで「ウリポー」が主題の形式で取り上げられた直後、2Bでは「模様・形」が主語の形式で取り上げられる。「模様・形」は「ウリポー」の属性として言及されている。「イノシシ」は「ウリポー」の親であるが、これは5Bで「も」によって、「ウリポー」と類比の関係で取り立てられている。さらに11Aの疑似疑問(半クエスチョン)の上昇するイントネーションをとまなう無助詞成分「縦線」は、「模様」の種類として取り上げられており、この発話には無助詞成分の「イノシシ」が補われている。以上のように、主語等で取り上げられた対象には、相互に階層関係や派生関係が認められる。さて、(2)の参加者A Bが、この談話を組織化する過程を考えよう。まず、Aによって、1Aで、「ウリポー」という名称が選択された理由説明が要求され、これが(2)全体にわたる目的と話題になる。ついで、2Bから4Aの発話によって、着眼点が模様なのか形なのかの主語を媒介として簡潔に検討される。さらに、5Bからは名称の起源を模様とするか形とするかで、より詳細に部分的な話題が構成されてゆく。その

中の、無助詞成分で開始される11Aと19Bの部分は、模様を構成する線の属性に関する議論である。これは、名称の選択された理由を模様だとする10Bと22Aのまとまりに介入するサイドシークエンスである。21Bは10Bと呼応する理由説明の発話であるが、結論は保留される。すなわち、最初の問題提起に応じて、二つの下位の項目が同位関係で排他的に取り上げられ、この下位の項目に関わる注釈的な談話がさらに内部的なまとまりを構成している、ということである。

このように、談話は部分的なまとまりによって複合的に組織化されているわけだが、そのまとまりの境界に、先に指摘した主語または主題・取り立て成分・無助詞成分がしばしば出現している事実がある。主語等による叙述の対象を取り上げるはたらきが、談話の広い範囲において話題を構成し、談話を組織化する過程に優れて貢献していることが明らかである。それゆえ、談話の中で主語のはたらきを考えるためには、広く話題のまとまりが成立する範囲を、発話よりも大きい中間的な単位体とみなし、そこに位置づける必要がある。

三 談話の展開過程における主語のはたらき

主語には、談話のまとまりを構成し、これを組織化するは

たらしきあることを前節で観察した。次に、(1)のc dにあげた特性を視野にいれながら、参加者が相互に関わり合う過程で、個々の発話において話題を取り上げ、談話を展開させ、発話を関係させる方法の類型を観察しよう。

三・一 新たな話題の導入または派生

談話の任意の局面で、それまでの話題と切り離して新たな話題が導入され、または関連する話題が派生させられる。この過程に主語等がどのようにはたらくのか、考える。

(3) 1 C .. あのせん、あのほら、校長先生いたじゃん。

2 C .. ー、もー終わるところに来たあの先生。

3 D .. ー、ー、ー。

4 C .. あの先生、実はねー、Eさんの叔父さんだって知

つてた？

(4) 1 F .. 一年間だけ仮性花粉症になったことがあるけど。

2 G .. ーいーよねー、治ってねー。

3 F .. ー、あつとゆー間に治った。

4 G .. 目ーかゆいでしょー。

5 F .. ー、耐えられないわ、あんな。

(5) 1 F .. 夕顔とか入れるからね、同じよーなものだよね

ー。

2 G .. ー、おいしーよね。

3 F .. // あのはじけたとき、

4 G .. 夕顔の、夕顔の、あんかけ// がさー、おいしー

よねー。

5 F .. はー、そー、お

いしーよねー。

6 G .. 大好きだあれー。

7 F .. でも夕顔のあんかけにはちよと悪い思い出があつ

てねー。

(3) 1 C は、同意要求の機能をになう存在文により新たな話題の導入をはかっている。ただ、1 C では情報が不十分であるため、2 C で補充し、特定しやすくする配慮がなされる。

その後、これを話題の中核とする談話が、4 C から展開される。ともに無助詞成分で表現されている。

(4) は、「花粉症」を話題とする談話の部分だが、上位話題との関連で、存在文の発話1 F に発話者の経験を主語で、同意要求の発話4 G に「目」を無助詞成分で派生させている。

(5) では、1 F ですでに談話に導入されていた「夕顔」から4 G の「夕顔のあんかけ」を主語とする同意要求の発話で、新たな話題を派生させる。さらに7 F では話題の領域として

「夕顔のあんかけ」を維持させながら、関連する話題として、存在文の主語の形態で「悪い思い出」を導入している。

存在文は、新たな話題を導入する形式としてしばしば観察されるが、主語または無助詞成分が話題の対象を表現している。存在文以外の類型にあっても、上位の話題から下位の話題が派生する際、例にみるように主語または無助詞成分が話題の対象を取り上げる場合が少なくない。このことは、前節で観察した結果とも整合する。

談話の参加者については、(3)では話題を導入し、展開を方向付ける者が固定している。これは参加者の間で知識の量に多寡が生じているからであり、無助詞成分を提示するのは、情報を掌握しているCである。(4)(5)にあつては、先行する話題を取り上げる話者と、後行する話題を取り上げる話者が交替している。(4)(5)で例示した談話行動では、参加者間に話題に関する知識の優位性に差が少なく、話題やそこから派生した対象にひとしく相互に言及しうるのである。新たな話題の導入をになう主語等の要素がどの参加者の発話に現れているかが、参加者の関係を反映していることが理解される。

三・二 談話の展開方法と主語

談話の過程で話題が導入され、それがどのように維持さ

れ、関係づけられていくのか、発話の関係と話者交替の方法に着目しながら検討する。まず、主語から主題への展開である。

(6) 1B…あと、みしらず柿？柿が結構有名かもしれない。

2 B…ん。

3 A…それはもー観光名物？

4 B…そーだね？

1 Bでは、まず疑似疑問の無助詞成分で「みしらず柿」が新たに導入された後、主語の形態で「柿」が取り上げられる。3 Aでは、これを指示表現による主題として取り上げ、その対象の現状に関する詳述を要求する。はじめに「柿」を取り上げたBから話者が交替することで、情報をより詳細に説明する展開がはたされている。談話において、先行文脈に主語として現れた対象を話題とする典型的な例である。

次に、排他的な意味の認められる例を見る。

(7) 1 F…おとーさん先生じゃないのー？

2 G…ちがうよー、//おとーさんが県庁でー、おかーさんがー、先生なの。

3 F…

あなんだちがうの。

4 F…あそーなの。

5 G ..んー、公務員一家。

6 G ..じーちゃん市役所（笑い）。

7 F ..わー本当だー。

1 Fでは、無助詞成分で言及される「おとーさん」の職業がGに対して確認要求される。話者が交替して、確認の情報を提供する2 Gでは、父母の職業が取り上げられるが、相互に排他的な叙述であり、「くが」の形態が選択されている。祖父の職業を叙述する6 Gは、5 Gの「公務員一家」であることを証拠だてるため、補足的に関係づけられた発話であり、無助詞成分が用いられて排他性は失われている。

排他の関係に対し、対比の關係の例をあげよう。

(8) 1 A ..福島は？

2 B ..ないよ。

3 A ..え？

4 B ..クマはいるけどねー、イノシシは知らない。

(8)は、福島県に棲む動物の種類が話題である。4 Bは、一つの発話において、その種類を対比的に関係づけ、二つの対象を「くは」の形態で表現している。典型的な対比關係である。次に、話者交替の過程で対比關係の生じる例を見る。

(9) 1 B ..うちのすごいギーギ言ったでしょ？//最初から。

2 A ..

3 B ..んー。

4 B ..(1.3)言わなかった？

5 A ..うちの、めったに鳴かないから。

AとBの飼育しているハムスターを話題とする談話である。1 Bで「うちの」が無助詞成分で表現されているが、この発話ではBのハムスターだけが取り出されていて対比の意味は認められない。この後、話者が交替し、4 Bの情報要求に応じる5 Aは、自分のハムスターについて1 Bと否定的な關係にある叙述を行っている。この段階で、明示的な対比關係が生じ、5 Aでは「は」で「うちの」を取り立てている。

最後に、類比關係の例を観察する。

(10) 1 B ..え、ウマー？とか思つて後ろを見たらブタが突進

してきて、（吸気）//女の子にバーンてぶつかっ

てー、

2 A .. (笑い)

3 B ..ブタもふつとび、女の子もふつとび。

Bの経験した事態をAに語る談話である。1 Bで「ブタ」「女の子」への言及があるが、3 Bではこの両者を「も」で取り立て、同一の叙述を行つて類比關係を成立させている。

言つてたね。

(1) 1 A.. 餌はいー手だよな。

2 B.. ー、絶対。

3 B.. あれで私手乗りハムにしたもん。

4 A.. ー。

5 B.. ー。

6 A.. 私もー、チーズ手のひらん乗せて、

7 B.. ー。

8 A.. 食べたいなら乗ってこいつて。

(1) はハムスターの餌が話題である。3 Bで「私」を無助詞成分で取り上げてBの経験が主張される。話者が交替した6 A・8 Aでは3 Bと類似したAの経験が叙述されるが、この発話の「私」は「も」で取り立てられていて、3 Bとの間で生じる類比関係が明示される。対比関係や類比関係は、(8)以降で観察したように、同一の話者が発話権を維持している場合と、話者が交替している場合とにより、談話の展開するどの局面でその関係が成立するかに、相違が生じるのである。

四 むすび

最初に、主語とこれに類する要素が話題の対象を多様な階層や派生関係で取り上げ、談話を組織化することを確認し

た。ついで、談話の展開する過程で、どの参加者が主語に言及し、話題を導入・派生させるかが、談話に対する優位性の差と関連すること、主語等の形態の選択が発話の機能・関係や話者交替のありようと関連することなどを観察した。談話の組織や展開の問題は、統語論の現象と別のレベルでとらえられる傾向にあった。本稿で示したような現象が、談話論と統語論の接点として、さらに検討されることを期待する。

【参考文献】

- 加藤重広(一九七)「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」『富山大学人文学部紀要』三七
- 佐久間まゆみ他編(一九七)「文章・談話のしくみ」おうふう
- 杉本武(二〇〇)「無助詞格のタイプについて」『文芸言語研究 言語篇』三
- 砂川有里子(一九七)「談話主題の導入形式に関する研究ノート」存在文とコピュラ文の特立提示機能について」『文芸言語研究 言語篇』三
- 沼田善子(一九七)「現代日本語の「も」ーとりたて詞とその周辺」『も』の言語学』ひつじ書房
- 野田尚史(一九七)『は』と「が」くろしお出版
- 野村真木夫(二〇〇)「日本語のテクストー関係・効果・様相」ひつじ書房
- 長谷川ユリ(一九七)「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』六〇
- 丸山直子(一九七)「助詞の脱落現象」『言語』第三巻号

(上越教育大学／日本語学)